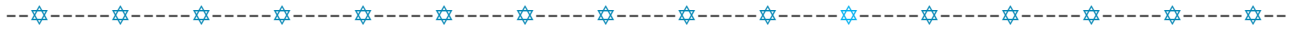


373 『反キリスト帝国を描写する脅威の終末預言』

～黙示録 17 章後半～

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



皆さん、こんばんは。今マイクを握った瞬間に「冷たっ！」と思いました。
こんなに冷え切っている中、YouTube でご覧頂くのはほんとに便利だなと思います。

今日は 2 月 17 日。欧米の新聞では、昨日 16 日に ロシア軍がウクライナに攻め込むだろうということが情報として飛び交っていました。実際にはそれは起きなかったんですが、今 国境沿いに 13 万 - 14 万くらいの軍隊が張り付いたままだと言われていています。これ、いったい結末はどうなるんでしょう。プーチンの狙いはハッキリしてます。ウクライナが NATO に入るのを阻止する。

そのためには どうしたらいいんでしょう。ウクライナを脅せば脅すほど、もっと NATO に入りたいと思うんじゃないですか？ ある意味で逆効果のことをやっているように見えるけど、実はそうじゃない。プーチンは考え抜いてますねえ。

NATO の条約の中に第 5 条というのがあって、“加盟国の 1 つがどこかの国に攻め込まれたら、全員でやり返す” という内容です。集団的な安全保障条約ですよ。ということは、今にも戦争しそうなのは NATO に入れたくないということなんです。そんな国をメンバーに入れてしまったら、NATO はみな戦争に巻き込まれてしまう。

ロシアがウクライナを今にも攻撃しそうだと、いう時にウクライナを NATO に入れてしまったら、やりたくもないロシアとの戦争をしなければならなくなる。そんなことは誰も御免なんです。今 ヨーロッパの国で、ロシアと戦争してもいいと思っている国はどこもありません。エネルギーをロシアに依存しているから。

すなわち、こういうことです。ウクライナを NATO に入れられないために、ロシアとウクライナの間にいざこざの状態をつくり、長引かせておくということ。大量の軍隊をずっと置く必要はありません。今度の危機で、ウクライナとロシアの間に根深い、後々こじれるような問題を植え付けることさえできるなら、両国はずっと仲が悪くなるので、その状態が続いている限り、NATO はウクライナの加盟を了承しないでしょう。

このウクライナの問題を見て分かるように、ロシアという国は、よその国がどの方向に進んで行くか指図しようとしています。そして武力で脅して、国境線を変えようとしているんですよ。国連憲章に違反しているのですが、民族自決の問題や、武力で国境線を変えようとするのを押し進める考えは帝国主義です。これはロシアだけじゃなくて、中国もイランもそんなことやってるわけですよ。

この帝国主義の源流をさかのぼるとローマなんです。このローマの流れを汲む最終的な大帝国（仮に 反キリスト帝国と呼んでおきましょう）が、世界を 3 年半にわたって支配する時が来ます。

人類史上最も恐るべき時代ですね。

ローマ帝国を源流とする最終的な反キリスト帝国について 詳しく預言している箇所が、今日皆様と一緒に見たい黙示録 17 章後半です。

黙示録 17 章は大きく分けて 2 つのこと、1 つは世界統一宗教について書いてありました。

もう1つは、最初の3年半の間 世界統一宗教を下から支えている獣の国について。
今日はそこから考えたいと思います。

ところで、今日見るところは、今まで見た箇所の中で最も難解です。『ざっくり黙示録』ですが、今日はどうしても“ざっくり”では分からないんじゃないかなあ。非常に難解。なんですが、難しくても飛ばさずに全部やるというのが『ざっくり黙示録』のコンセプトになっていますので、チャレンジしたいと思います。「難しいなあ、今日のは」という方は、結論の部分だけ聞いていただいたらいいと思います。でも、聖書全体を理解するには大変役立つのではないかと思います。

黙示録 17 章

7.すると、御使いは私に言った。「なぜ驚くのですか。私は、この女の秘められた意味と、この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘められた意味を、あなたに話しましょう。」

黙示録 17 章でヨハネは幻を見ます。それは、贅沢な物で着飾った女（大淫婦）が獣の上に乗っている幻。この**大淫婦は世界統一宗教**であると前回解説しました。

今日は、その**女が乗っている、七つの頭と十本の角を持つ獣**の解説です。

獣とは？ 七つの頭とは？ 十本の角？ それを非常に詳しく解き明かしているのが 17 章後半です。

黙示録でヨハネが“**獣**”と言う時は、2つの意味があります。

◆**反キリスト**。反キリストの別名が獣。獣は人間が調教できない動物です。どんな人間も反キリストをコントロールすることはできません。

◆**獣が支配する国**。反キリスト大帝国と言い換えてもいいでしょう。反キリストの国は、反キリストの性質を反映しているからです。この2つは切り離すことができないんですね。

8.あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上（のぼ）って来ますが、滅びることになります。地に住む者たちで、世界の基が据えられたときからのちの書のみに名が書き記されていない者たちは、その獣が昔はいたが今はおらず、やがて現れるのを見て驚くでしょう。

8 節に出て来る**獣**は反キリスト個人のことです。国（反キリスト帝国）ではなく、反キリスト自身のこと。この箇所は読んでもピンときません。

なんで？ 聖書の原文にない言葉が、翻訳者の余計な親切心によって付け加えられているからです。

あなたが見た**獣**は、**昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ますが、滅びることになります。**

“昔は” “今は” “やがて”。これは原文のギリシャ語の聖書にはありません。

日本語に翻訳する時、勝手に付けたんです。ですから、こう読むべきです。

「いたが、いなくなり、やがて上って来る。」「生存していたが、生存しなくなり、また上って来る。」要するに「生きていたけれど、一度死に、復活した。」反キリストは一度死にますが、よみがえります。

なぜ、反キリストの復活を語っていると解釈できるのか？ 2つ根拠があります。

◆この**獣**（反キリスト）は上って来た。どこから上って来たのでしょうか？ **底知れぬ所から**。

底知れぬ所はギリシア語でアブソス。新約聖書に9回出て来る言葉です。

アブソスはハデスという死後の世界の一角を占める場所。悪霊たちが閉じ込められるための留置所です。

そこから上って来る。死後の世界からもう一度 地上世界（現世）に生き返る。
つまり、反キリストは死んでアブソスに一度落ちるけど、悪魔の力によって復活し、また出て来る。

◆ここだけでなく、もう 1 箇所でも反キリストの復活について語っているからです。

黙示録 13 章

1. また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。（さっきと一緒です。） その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。

3. その頭のうちの一つ（反キリスト）は打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。全地は驚いてその獣に従い、

打たれて死んだというのは病死や老衰じゃない。何者かの攻撃を受けて一度死にます。

死んだと思われたが（死んでないのに死んだと誤解されたのではなく）、死んだという事実が認識され、知れ渡ってしまったが、その致命的な傷は治った。死んだのに生き返った。それで全地は驚いてその獣に従い、

4. 竜（悪魔）を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。

竜の力で、反キリストは死んだのによみがえる。人間は誰も死には勝てないと思っていたら、打ち勝った人だということで、全地が反キリストにひれ伏す。

これが起こるのは艱難時代のちょうど真ん中の時点です。そのことを指して言ってるんです。

17:8 あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ますが、滅びることになります。地に住む者たちで、世界の基が据えられたときからのちの書に名が書き記されていない者たちは、その獣が昔はいたが今はおらず（いたがいなくなり）、やがて現れる（またよみがえる）のを見て驚くでしょう。

9 節。またしても獣の体の特徴が語られますが、これは帝国のことです。

9. ここに、知恵のある考え方が必要です。七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。

10. 五人はすでに倒れましたが、一人は今いて、もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずですが。

この箇所、実は難しいです。これを解き明かすには、**知恵のある考え方が必要です。**

知恵のある考え方とは、“聖書は聖書で解釈するという原則に基くなら、この箇所を理解するために、聖書の他の箇所から知恵を拝借する必要がある”ということなんですね。

聖書は自分の空想力や想像力で読んでではない。聖書は聖書で解釈しなければなりません。

七つの頭と十本の角を持っている獣については 17 章以外に、**黙示録 13 章とダニエル書 7 章**に詳しく書いてあります。そこで**ダニエル書 7 章**の光をお借りして、この箇所を考えたいと思います。

ダニエルは世界を支配する 4 つの帝国の幻を見ますが、その 4 つの帝国を動物 / 大きな獣で見ると。そして、この世界を治める 4 頭の大きな獣が上って来ると言います。

ダニエル書 7 章

1. バビロンの王ベルシャツアルの元年（BC553/バビロニア崩壊の 14 年前）に、ダニエルは寝床で、ある夢と、頭に浮かぶ幻を見た。それからその夢を書き記し、事の次第を述べた。

- 2.ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。**
3.すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。

聖書で大海と出て来たら、太平洋や大西洋ではありません。ユダヤ人は、約束の地から太平洋・大西洋を見ることはできません。彼らにとっての大海はいつでも地中海です。
これから四頭の獣になぞらえた大きな帝国が出て来ますが、それらはいずれも地中海覇権を握ります。

- 4.第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。**

百獣の王ライオンのような風格があり、鷲の翼をつけていた。
中東／オリエントの世界を統一した世界最初の国はアッシリアです。エジプト文明とメソポタミア文明の両方とも統合し支配しました。
アッシリアを滅ぼしたのはバビロンとメディアです。ナンバーワンを倒した国が新たなナンバーワン。
バビロンが中心だったのでバビロンが第一の獣。獅子ですね。

- 5.すると見よ、熊に似た第二の獣が現れた。**

バビロンを倒したのはペルシアでしたね。ペルシアは熊になぞらえられています。
熊はライオンと比較するとサイズが大きいですね。ペルシアは、西はアフリカから東はインドまで。めちゃくちゃ広い。これを治めたのがペルシア。

- 6.その後、見ていると、なんと、豹のような別の獣が現れた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。**

ペルシアを倒すのがアレクサンドロスのギリシア帝国。
豹が翼を持っているから非常にスピーディーでしょ。どれくらいで治めたんですか？ 10年です。
たった10年でアフリカからインドまで制圧。軍事の超天才 アレクサンドロス。

このギリシア帝国を滅ぼす国が現れます。ところがその国は、既存の動物では表現できなかったんです。
ギリシア帝国 未裔国家を滅ぼすのはどこですか？ ローマですね。
セレウコス朝シリアをポンペイウス将軍が倒しました。

エジプトもローマによって倒されました。エジプトはギリシアだったんです。
今のエジプトは中東のイメージですが、プトレマイオス朝エジプトはギリシア人が治めていたのです。
女王クレオパトラはギリシア人です。

3頭の動物が現れて4頭目、ギリシアを滅ぼしたのはローマですが、ローマは他の帝国と違って、既存の動物で表現できないんですね。

- 17.これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。個人の王である。**
23.彼はこう言った。「第四の獣は地に起こる第四の国。」

ダニエル書でも、獣を“人”にする時と“国”にする時の両方があるんです。
ヨハネはそれを踏襲して、獣は反キリストという人を表すと同時に、反キリストが支配する国のことも指すということなんですね。

ところで、ダニエルが特に気になったのは、3頭の獣ではなく4頭目でした。

19.それから私は、第四の獣について確かめたいと思った。それは、ほかのすべての獣と異なっていて、非常に恐ろしく、牙は鉄、爪は青銅で、食らってはかみ砕いて、残りを足で踏みつけていた。

ほかのすべての獣と異なっていて。何が異なっているのか？ 時代と共に形態が変わって行くんです。

どういうことか？ 例えば、ライオンの赤ちゃんは基本的にライオンの形してますよ。たてがみは生えてないけれど、生まれた時からライオンの赤ちゃんだとすぐに分かる。熊の赤ちゃんだって、基本的には熊の形してるんです。大人とは比率が違うだけです。豹も子供と大人ではサイズが違うだけで、豹の子供は基本的に豹の形。

ところが、**第4の獣**は発達段階があって、時代と共に姿かたちが変わって行くんです。

これは自然界でいうと変態生物。例えば昆虫。昆虫は卵から孵化してアオムシみたいな状態になって、やがてサナギになり、羽化して羽生えたら蝶々になって飛んで行くじゃないですか。発達段階によって前の姿と全然違う姿に変身/変態する。しかし、生命体としては同じもの。

第4の獣と言われている帝国は、時代と共に形態を変えていきますが、**ダニエル書 7 章**では、5 段階で姿を変えることについて書いてあります。

第1段階：ギリシア帝国を滅ぼしたローマ帝国。

第2段階：ずいぶん時代が経って終末時代。

23.彼はこう言った。「第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。」

第四の国。この“国”は単数形です。やがてローマ帝国の流れを汲む世界統一政府ができます。

全土は全地球。全地球をコントロールする単一・単独・単数形の国、つまり世界統一政府がこれから出現します。それはローマ**第4の獣**の流れを汲む**第2段階**。

第3段階：**24.十本の角は、この国（世界統一政府）から立つ十人の王。**

世界統一政府はいつまでも続きません。10の国にバラバラに分かれる。これが**第3段階**。

第4段階：**24.彼らの後に、もう一人の王が立つ。**

10の国にそれぞれ1人の王様がいますが、10の王国の時代の後に、10人の王とは別に もう1人の王が立つ。これが反キリストです。10人の王と反キリストは、仲違いするのではなく蜜月状態を迎えます。同居できます。協力関係が持てる。これが**第4段階**。

第5段階：**24.彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。**

10人の王のうち3人が反キリストに逆らい、その3か国と反キリストが戦って、彼らは滅ぼされます。それで、反キリストの帝国は最終的に7か国になるんです。これが**第4の獣**の最終段階。

第4の獣の発達を、最終段階に至るまで5段階に分けて説明しているのが**ダニエル書 7 章**です。

ところが**黙示録 17 章**では、**第4の獣**を7段階に分けて説明するんですね。

後の時代に啓示される預言ほど、より詳しくなるんです。ダニエル書は今から2600年くらい前。黙示録は1900年くらい前、AD95年頃に書かれたと言われています。

黙示録のほうが終末時代に近いので、より詳しい啓示がなされているんですね。
そのことを踏まえて、もう1度**黙示録 17 章**に戻ります。

9.ここに、知恵のある考え方が必要です。七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。

この女が座しているのは、7つの頭と10本の角を持っている獣でした。

(7.この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣)。

これは第4の獣のことで、それ以前の獣は関係ありません。

「ローマ帝国に端を発する第4の獣が、7つの段階を経て最終形態に行きます」と言っているんですね。

この女が座している七つの山。山は聖書では支配体系や国家のことです。1箇所だけ見ましょう。

エレミヤ書 51 章 25 節

全地を破壊する、破壊の山よ。見よ、わたしはおまえを敵とする。一主のことば一わたしはおまえに手を伸ばし、おまえを岩から突き落とし、おまえを焼けた山とする。

これはバビロンに対することばです。バビロンは平地にあるんですよ。なのに、なぜ**山**と言うんですか？
ここでの**山**は統治機構／国家／支配体制のことです。**焼けた山**（滅びた国家）とする。滅亡預言なんですね。

他にも**ダニエル書 2 章 35 節**なども調べておかれたらと思います。

もう1度**黙示録 17 章**。この女が座している七つの山、7つの頭と10本の角を持つ第4の獣。

「この女は7つの支配体系の上に乗っかっていて、7つの発達段階を代表する7人の王がいる」と読むのがいいと思います。

ローマ帝国は6段階を経て終わりました。7段階目は、最終的に反キリスト帝国の時に登場します。
それを簡単に説明します。

ローマ帝国はいつ出来たか？ BC753年。“七五三（ひちごさん）”ですねえ。

BC753年の少し前、ロムルスとレムスという王位継承権を持っている双子の兄弟がいました。

クーデターで皆殺しの目に遭うところを、可哀想に思った兵士が秘かに逃がしてやり、伝説によると、狼の乳を吸って大きくなったと言われています。

やがて国を取り戻しますが、出来上がったその国の国家方針についてロムルスとレムスが兄弟喧嘩し、兄のロムルスがレムスを殺した。その後、自分の名前にちなんで国名を付け替えたんですね。

それがローマです。ロムルスのロムから取ってローマ。

そこから約250年間、ローマは王が支配する国になりました。王政です。これがローマの**第1段階**。

BC509年、王政は終わってしまいました。タルクィニウス王が、土木下水工事のために一般民衆を酷使して不満が募っていたところに、彼のぼんくら息子セクストゥスが、輪を掛けて非常に大きな問題を起こした。貞淑な人妻を強姦したんです。

事の発端はこうです。ローマの上流階級の男たちが集まって宴会をやった時、誰の妻が一番貞淑かという自慢話が始まったんですね。みんな「自分の妻だ！」と議論になって譲らない。

「婿が明かないから、今見に行こうやないか！」

それぞれが馬をとばして家に帰ってみたら、全員不倫してたんですよ。

ところが1人だけ、コラテヌスの奥さんのルクレティアは非常に貞淑で、機織りをしていたんです。みんなが淫らな生活している時に、彼女だけが実に貞淑だったということで評判になりました。それを聞きつけたぼんくら息子が「ほお～、そんなに素晴らしいんだったら、ひとつ俺が試したろ」と言って、主人がいない間に窓から忍び込み、強姦しようとするんです。

ルクレティアは必死に抵抗するのですが、「そんなに抵抗するんなら、おまえを殺して、おまえの隣に死んだ奴隷を置いておく。おまえは奴隷と密会し不倫していたという噂を流すぞ。そしたら家の名誉は地に落ちて、おまえだけでなく残された家族は恥を見るだろう。」
そこまで脅迫されて、やむなく身を任せてしまうのです。

ぼんくら息子が去った後、彼女はすぐに信頼できる友人を募って、「すぐ来てください」と夫と父を呼び、そして夫と父親の前で、今あったことを全部言いました。夫は慰め、赦し「もういいから。」しかし彼女は「罪は免れても、罰からは逃げられません」と言って、隠し持っていた短剣で胸を突いて、みんなが見ている前で自害したんです。

それを見たブルータスが短剣を引き抜いて、「こんな事、許されていいか？ このローマに王は要るか？ 王族なんか追放してしまえ！」と一般民衆に言った時、山が動いた。
みんなが「そうだ！ そうだ！」ということで、遂に王族が追放されてしまったんです。それが BC509 年。

王がいなくなった後、どんな政治形態に変わったのかというと貴族政治なんですね。

- 元老院（大体 300 人くらいの貴族、任期は終身）；今で言う貴族院
- 民会；今で言う衆議院。メンバーは貴族と平民。平民とはローマ市民権を持っていて、奴隷ではない。貴族でもない。
- 政務官；実際に行政をやる。このトップがコンスル。今で言う大統領。大統領は 2 人で任期は 1 年だけ。なぜそんなに短い任期で 2 人を立てたのか？ もう王様を持つことはこりごりだったんです。コンスルが王様になったら困るということで、独裁者が出ないようにこんな形にしました。

これを見ていると、アメリカの政治形態に似てませんか？ 上院・下院・大統領・・・違う。
元老院は全員貴族。民会で力を握っているのは貴族。政務官に選ばれるのは全員貴族。結局 貴族政治です。人口の大半は平民ですが、実際に特権を持って政治をするのは貴族なので、BC509 年からは王政に変わって貴族政治になった。これが**第 2 段階**。

しかし、この貴族政治が長続きしないんですね。BC494 年、聖山（せいざん）事件が起きました。
簡単に言うと、平民たちのストライキです。

ローマ兵というのは、ローマの自由を守るために、平民たちが自分のお金で武器を調達して戦うんです。給料出ません。“ローマという共同体を守るのは、ローマ市民の当然の特権だ”という考えに基づいて、ローマ市民権を持っている人たちは自前で武器を調達し、兵士となって働くんですね。
しかし、命懸けの戦争を戦って勝っても、取った領土は全部貴族間で分配され、自分たちには何にもおこぼれがない。報酬がない。しかも兵役がある。重税も課せられている。やってられるかっ！

とうとう爆発したのが BC494 年。平民たちが一切の義務を放棄して、聖山という山にストライキで立て籠もったんです。

それで困ったのが貴族です。ローマ軍の主力は平民。平民がないということは主力がないこと。それが周辺諸国に知れ渡ると攻め込まれます。その時、貴族だけで立ち向かうことができますか？絶対勝てない。そこで「頼むから戻って来てくれ。貴族政治は…やめる…。」

ここから貴族と平民の混合政治になります。護民官（ごみんかん）を置くんですね。元老院で決めようがコンスルで決まろうが、平民が「嫌だな」「と思ったら、護民官は拒否権を使えます。

それまでは貴族と平民は結婚できませんでした。身分によってパーン分かれてて、貴族同士・平民同士でないと結婚できないのですが、これを境に徐々に法改正してローマ法（十二表法）を制定し、貴族平民混合政治に劇的に変わったんです。これがローマ発達段階の**第3段階**。

それがまた変わります。BC390年、アッリアの戦争が起こりました。ローマの北の方からケルト人が攻めて来て、あろうことかローマが負けて、ローマ市そのものがケルト人に占領されてしまったんです。ローマ人はローマから追い出された。その時、ローマ人の妬みによって追い出されていたカミルスという将軍を もう一度なんとか呼び戻して、ケルト人との戦争に勝利を収めました。

そしてローマの町に戻った時、みんな絶句。もう完全な廃墟。焼け野原。何にも残ってない。それを見た時、ローマ人たちはローマの町を捨てて別の所に集団移住し、新しく町を造り直そうとしますが、カミルスが「待ちなさい。我々のルーツはローマじゃないか。ここを離れてどこへ行くことができますか」と言って踏み止まり、ゼロから建て直すんです。だから、カミルスは“ローマ建国第二の父”と言われています。

このことを契機に、“常に戦争して膨張することが、侵略されないための秘訣である。攻められないためには攻め続ける以外ない”ということで、ローマは大軍拡膨張時代になり、その領域がどんどん大きくなっていきます。

しかし、戦争を長く続けるというのはどういうことですか？先ほど申し上げたように、ローマ兵というのは、ローマ市民権を持っている農民たちが戦争時に自前で武器を買い、そして戦争に参加する。ローマの一般市民たちが兵士として長い間戦争をやっていると、畑を耕すのはお母さんやおじいさんになってしまいます。お父さんは戦争に行ったらきり帰って来えへん。留守を守っているお母さん・おじいさん・おばあさんが働いて畑を守るけど、そのうち誰かが病気になったりしたら働けなくなり、結局畑を売り飛ばして食い繋ぐ。

長い戦争が終わって帰って来たら、畑無い。家無い。財産無い。仕事無い。こういう人たちがルンペン・プロレタリアートというか、自分の農地を手放して、それを全部貴族たちが買い占め、都に集まっていくんですね。軍備拡張でローマの領土が膨張している時代なので金回りも良く、都に行ったらなんとか食っていける。だけど、ローマ市民権を持っている者だけがローマ軍に入れたので、どんどん無職になってしまうと兵士の数が減っていったんです。そしたら戦い続けることはできない。

そこで、マリウスが大改革をやりました。今までは、自分のポケットマネーで武器を買って兵隊に行く。だけど、みんな畑手放して自活できないんだから、もうええやん。財産無くて兵隊になったらええやん。「ほな、武器どうするんですか？」そんな、俺が全部面倒見たるわ！ということで、武器の面倒を見、食料の面倒を見、そして、年取って引退したら 引退後の年金の面倒まで全部見始めた。

そうすると、ローマ兵の変質が始まりました。今まではローマを守るために兵士になって来たけど、忠誠心の的が、ローマという国家から自分の主君に向くようになりました。それで軍閥政治が始まるんです。マリウスがやっていることをみんなが真似し出したんですね。それぞれ貴族が兵士を養うことによって、その兵士はローマ兵というよりも私兵。なので、この時代からずっと段々 内乱時代に入って行きます。後に行けば行くほど内乱時代で、收拾つかなくなりました。

これにピリオドを打つのが BC59 年。三頭 (さんとう) 政治が始まります。これはローマ帝国の**第 5 段階**。特に有力な 3 人の将軍がいました。

- クラッスス (BC115 頃-BC53) ;ローマ ナンバーワンの金持ち。
- ポンペイウス (BC106-BC48) ;ローマ ナンバーワンの将軍。
- カエサル/英語名はシーザー (BC100 頃-BC53) ;ローマ ナンバーワンの人気者。

クラッススはやがて死にます。残ったのはポンペイウスとカエサル。

クラッススがいる時は 3 人でまだバランス取れてたけど、やがて 2 人の間に緊張が走るようになりました。

カエサルはガリヤ (今のフランス) に遠征に行きます。『ガリヤ戦記』聞いたことあるでしょ。名著です。当時はまだローマ帝国に入ってなかった。彼はガリヤで勝ち続け、そこで押さえた金・銀・財宝・富は全部自分がもらい、兵士たちに分け与えて行きました。

カエサルは人気者ですが、実はもう 1 つのナンバーワンがあるんです。ローマー (いち) の借金王。ローマ中の金持ちから借金しまくるんですね。

その金で何をするのか? コロシウムで拳闘大会を見せたり、ものすごく豪勢な食料買い込んでパーティーやる。人々の度肝を抜くような超大スペクタクルのパーティー。そうやって民衆に振る舞うわけです。民衆は、「我々に奢るために借金だらけで首回らへんで、そんなん気の毒やないか。今度の選挙ではカエサルさんに投票して、公職に就いてもらって、儲けさせたらな あかんわ。」
今 選挙でやったら絶対アカンやつやけど、この当時はオッケーなのよ、これ。

人気が上がれば上がるほど、元老院は「こいつ、大丈夫かなあ。こいつ、ヘンな気 起こして王様になりたがるんちゃうか。」 ちょうどどうまい具合に、ポンペイウスは彼と仲が悪い。元老院はポンペイウスをそそのかしてカエサルと戦わせるのですが、カエサルが勝つんです。ポンペイウスはエジプトまで逃げて行きました。カエサルはエジプトまで追いかけて行きます。ポンペイウスはエジプト人に殺されますが、そこでカエサルが出会ったのがクレオパトラですよ。クレオパトラの話はめっちゃくちゃ面白いけど、黙示録と関係ないから、今日はそれはしないんです。

三頭政治は何回かあるのですが、カエサルは三頭政治のライバルを全部蹴散らして、最終的には人気絶頂で、我こそは皇帝になるつもり満々。皇帝になろうとしていることが分かったので、元老院から差し向けられた人たちがカエサルを暗殺しました。

有名な言葉がありますよね。「ブルータス、おまえもか。」

ブルータスとカエサルは 25 歳くらい歳が離れてる。ブルータスのお母さんは若い時 カエサルと付き合い合っていました。カエサルは女関係むちゃくちゃな奴なんです。ブルータスの生年月日見て「俺の子ちゃうか?」と思っていたフシがある、という噂があります。

さて、「皇帝なんか要らん」というローマの中で、皇帝になろうとした実力者が暗殺によって終わった時、「あ〜良かった」とならなかったんですね。

その時に一番不満を持ったのは、カエサルの支配下にいた兵隊たちでした。
私兵なのでカエサルが亡くなったら、「我々の給料 誰が払ってくれんねん？ ブルータス、おまえ払うてくれるんか？ 元老院よ、おまえたちが払ってくれるんか？」

払うことができた人が1人だけいました。カエサルの養子になっていたオクタヴィアヌス(BC63-AD14)。彼はカエサルの養子なので財産が全部懐に入り、そのお金でカエサルの兵士たちを養うようになって、あっという間にローマナンバーワンの実力者になったんですね。

そして BC27 年、**第 6 段階**に入ります。帝政です。
カエサルの養子オクタヴィアヌスが、“尊厳ある者”（アウグストゥス）、初代ローマ皇帝（在位 BC27-AD14）になるんです。この時、元老院は反対しなかった。
これだけローマが大きくなったら、元老院の合議制だけではもうやっていけない。観念して「オクタヴィアヌスが言っていることも一理あるよな」と話が変わり、何度も何度も「なっってください」と説得して、とうとうアウグストゥスになりました。

この時代にヨハネは生きていたんです。**ヨハネの黙示録の 17 章。**

9.ここに、知恵のある考え方が必要です。七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。

ローマ帝国は 7 段階を経ます。

10.五人はすでに倒れましたが、一人は今いて、もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずで。

五人はすでに倒れましたが；ヨハネの時代には第 5 段階まで終わっていましたが、

一人は今（帝政／ローマ皇帝時代）いて；この時の皇帝はドミティアヌス（51-96/在位 81-96）。

エルサレムを滅ぼしたティトゥス將軍の弟ですよ。

このドミティアヌスの時代に、ヨハネはパトモス島に島流しになって、この**黙示録**の幻を見ているのです。

帝政がずっと続くんですね。この帝政時代のローマの政治のやり方を受け継いでいるのが、東ローマ帝国の継承国家であったロシア帝国。それがソ連になり、今ロシア。双頭鷹はローマの国章ですよ。
ツァー(tsar)という言葉がありますがカエサルのことです。帝国主義の原型はローマの帝政なんですね。これが第 6 段階です。

もう一人はまだ来ていません；まだ来ていない、これから来るであろうもう 1 人（第 4 の獣）の最終完成形が反キリスト帝国です。

彼が来れば、しばらくとどまるはずで；この最終形は艱難時代後半の 3 年半だけ。しばらくは 3 年半。反キリストは第 4 の獣の最終形として、3 年半の間だけこの世界を支配します。

11.また、昔はいたが今はいないあの獣（反キリスト）は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。

これも難しいんですねえ。反キリストは**七人のうちの一人でもあり**。

七人のうちの一人は今説明しましたね。ローマの 7 段階を代表する人物の 7 番目。ローマの 7 つの発達段階の最終形。7 人の中の 7 番目。反キリストは第 4 の獣の変化、最終形態だと言っているのです。

ところが、**八番目の王**ですが、と書いてある。何から数えて8番目なのか？
反キリストが生きている時代、彼と一緒に仕事する人たちが初めは10人いますね。
その中の3人が欠けて7人になります。7人を束ねて命令下すのが反キリスト。なので8番目なんです。

もう1度**ダニエル書7章**

19.それから私は、第四の獣について確かめたいと思った。

20.その頭には十本の角があり、もう一本の角が出て来て、そのために三本の角が抜け落ちた。その角には目があり、大言壮語する口があった。その角はほかの角よりも大きく見えた。

角とは何でしょうか？ **王**のことです。**24.十本の角は、この国から立つ十人の王。**

角=王。これを踏まえて、**20.その頭には十本の角があり**（10人の王がいたが）、**もう一本の角**（反キリスト）**が出て来て、そのために三本の角**（3人の王）**が抜け落ちた**。10-3=7。

もう一本の角（反キリスト）が7人の上に君臨するので、反キリストは8番目の王なんです。
ローマの発達段階で見ると7番目の王。彼が生きている時代の王たちの中では8番目の王。

このように 聖書は反キリストの情報を非常に詳しく語っているのですが、その解き明かしのために1つ大事なことがありますね。新約聖書だけ読んででは分からない。旧約聖書だけ読んでても分からない。聖書は新約と旧約全部合わせて66巻をもって初めて完結している。聖書は全て、神の靈感によって書かれた書物である。これが分かるのではないかなと思いました。

最後に**黙示録17章**に戻ります。というのは、反キリストの帝国のことばかり言って、最後を言ってないと気色悪いんですよ。反キリスト帝国は滅びますからね。終わりの部分も言わなければなりません。

13.これらの王たちは一つ思いとなり、自分たちの力と権威をその獣（反キリスト）に委ねます。

14.彼らが子羊に戦いを挑みますが、子羊は彼らに打ち勝ちます。子羊は主の主、王の王だからです。子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです。

反キリスト帝国は**子羊**（地上再臨するイエス・キリスト）に**戦いを挑みます**。

天にいるイエス・キリストと戦いようがないじゃないですか。しかしキリストは、反キリスト帝国を裁くために地上に下りて来られる。その時 反キリスト帝国は、すぐさま降伏せずに戦いを挑むんですね。その戦いが、いわゆる“**ハルマゲドンの戦い**”です。ハルマゲドンという所に一旦集合して、エルサレムに向かって進軍して行くんですね。しかし、**子羊は彼らに打ち勝ちます**。

この時、人類は2つのグループに分かれます。

◆反キリストに所属するグループ。◆子羊（キリスト）に所属するグループ。

子羊は反キリストに打ち勝つので、子羊（キリスト）に所属する人は、反キリスト（悪魔）に打ち勝つこととなります。

では、子羊に所属するためには どうしたらいいのでしょうか。

14.子羊は主の主、王の王だからです。子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです。

「私はキリストを信じているけど、全然忠実じゃなかった。あんなところも失敗した。こんなところも失敗した。忠実さを問われるなら、私は失格者だ」と、がっかりする方がおられるかもしれません。完全な人って いないと思うんですよ。

ここの**忠実**はピストイという言葉です。

ピストイとかピストスは、“忠実”と共に“信じる・信頼する”という意味があるんですね。

キリストを信頼する者、自分の救い主としてイエス・キリストを信じる者は誰でも、忠実な者・召された者として認められ、選ばれた者として認められるのです。

聖書は信頼に足る根拠を私たちに提供しています。それは、私たちに信仰を与えるためのものです。

ぜひ艱難時代に入る前、この恵みの時代に、イエス・キリストを救い主として信じてください。

心からお勧めします。

^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^

* 使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』

* 動画は YouTube で「[HCA 東住吉キリスト集会](#)」

* ラジオ番組「[聖書と福音](#)」(約 15 分) もぜひどうぞ。YouTube もあります。

* YouTube 「[ごうちゃんねる](#)」もぜひ見てください。